

結果可能表現について

About Result-Potential Expressions

周 国龍*

Guo long ZHOU

Abstract

可能表現を作るもとの動詞には動作主の存在と意志性が必要である。日本語の無意志自動詞述語文は一定の要件を満たせば結果可能表現と認められ、可能表現の一類とされる。しかし、無意志自動詞自身には意志性が顕在されないため、可能表現の形式である「れる」、「られる」を付けて、可能表現にはできない。表現全体の場面、文脈に現れる意志性で結果可能表現の意味を生じさせる。

本稿は日本語の可能表現の一類とされながら、無意志自動詞は可能表現の形式にできないというギャップがあることを指摘した。中国語の「動詞＋補語」構造という表現形式は可能表現の形式であり、可能の意味も有する。同じく可能の意味を有しているが、日本語と中国語は表現形式においてはずれが生じているわけである。このずれが学習者の誤用をもたらす原因であることを明らかにした。

キーワード：結果可能表現，無意志自動詞，動作主，意志性，「動詞＋補語」構造

1. はじめに

日本語では他動詞と意志自動詞に「れる」、「られる」¹⁾を付けて可能表現の形式にし、可能表現として使われる。可能表現の性質により能力可能、条件可能、属性可能と分類される。このほかに1の「開かない」、2の「上がらない」のような無意志自動詞を使った表現を「結果可能表現」とする考え方もある²⁾。

1. ドアがどうしても開かない。
2. 肩が痛くて、手が上がらない。

確かにこのような表現は中国語に訳せば、通常

3. 这个窗子怎么也打不开。
4. 肩膀很疼，手举不起来。

* 本学教授、対照言語学 (Contrastive Linguistics)

「打不开」、「举不起来」と訳すものである。これは中国語の文法形式で言うと、「動詞＋補語」³⁾という構造で、可能表現にも使われる。もし、中国語を母語とする日本語学習者（以下学習者とする）は3、4の中国語を日本語で表現する場合、いわゆる母語干渉により、

×5. ドアがどうしても開かれない

×6. 肩が痛くて、手が上がられない。

と「れる」を付けて可能表現の形式にする傾向がある。学習者の誤りやすい表現形式の一つである。今まで無意志自動詞の可能表現と中国語の「動詞＋補語」という形式で表す可能表現を様々な視点から双方の異同点について考察が行われてきたが、何故、結果可能という意味があるにもかかわらず、その他の可能表現と違って、「れる」、「られる」を付けて可能表現の形式にすることができないのかについてはまだ明らかになっていないようで、これが明らかになれば、学習者の誤用の原因も明らかになるであろう。

日本語において可能表現に用いられる動詞には動作主が存在しその意志により行為を実行するという条件を満たさなければならない。これは他動詞も自動詞も同じである。しかし、結果可能表現に用いられる無意志自動詞はこのような条件が満たされていない。可能表現の一類である以上、他の可能表現と同じように、「れる」、「られる」を付けて可能表現の形式にすることはできてもよさそうだが、結果可能表現に使われる無意志自動詞に「れる」、「られる」を付けて可能表現の形式にできないのである。何故、可能表現の一類というのに「れる」、「られる」を付けることができないのか、この原因を明らかにすれば、学習者の誤用の原因も自ずと明らかになるであろう。

一方、中国語の「打不开」、「举不起来」は「動詞＋補語」という構造で表現できる。常に動作主が存在し、意志を持っている動詞が用いられるため、可能表現と認められる。日本語の結果可能表現は可能の機能を有しながら、可能表現の形式にする条件を満たしていない所から乖離が生じていると思われる。また中国語の「動詞＋補語」構造は可能表現であると同時に可能表現の形式でもある。この種の可能表現における中国語と日本語とのギャップが学習者の誤用を引き起こす原因だと考えられる。

本稿の目的は、学習者の結果可能表現の誤用の原因を解明するところにある。

以下、「れる」、「られる」を用いて可能表現の形式にすることができない日本語の無意志自動詞の結果可能表現と中国語の可能表現形式である「動詞＋補語」表現形式の異同点を中心に議論していき、本稿の目的を達したい。

2. 行為の過程と結果について

日本語の動詞は他動詞と自動詞に分類され、その一部は他動詞と自動詞は形態的に対応していて、いわゆる有対自他動詞である。有対自動詞には、意志自動詞と無意志自動詞があり、本稿では主に無意志自動詞について考えていく。無意志自動詞述語文は人間などの

意志（意図）は含まれておらず、主に物事の変化の性質と物事の変化した結果の状態を表す。他動詞は人間などが意志（意図）的に何らかの行為を実行し、過去形の場合、動作主の意志によって行為の実行だけでなく、同時にその行為による結果ももたらされることを意味する場合が多い⁴⁾。一方、無意志自動詞は行為の過程を表すのではなく、主として結果を表す場合が多い。

7. 彼は車を直した。

8. 車は直った。

このように、日本語の他動詞と自動詞はそれぞれ異なった機能を果たすわけである。また、他動詞の過去形はすでに結果の状態が含められるので、あらためて自動詞を用いて表現する必要はない。言い換えれば、日本語の動詞述語文は動作主の行為の過程を中心に表現するか、物事の結果の状態を焦点に表すかという使い分けがあろうが、どちらかを用いれば表現として成り立つわけである。

中国語にも自動詞と他動詞がある。しかし、日本語と違って、他動詞の過去を表す「了」が用いられても行為自身の過去完了を表すだけで、その行為の結果については言及しないため、日本語にない補語成分で文字通りその行為の結果を補って述べなければならない場合が多い。これは中国語と日本語との大きな違いであり、この違いがそもそも学習者の日本語の自動詞表現に関する誤用の起因にもなっている。これは次の例からもわかるように、日本語は動詞が過去形になれば、その行為の結果も一緒に付いてくるため、自動詞を用いても一度同じ結果を言う必要もない。中国語の他動詞は行為そのものだけを表し、その行為の結果に言及しないため、日本語では非文になる表現形式でも中国語では普通に用いられるわけである。日本語において自動詞で結果を表す表現においても中国語では「動詞＋補語」の形式を取ることが多い。

9. 山田さんは車を直した。

? 山田修车了。

? 10. 山田さんは車を直して直った。

山田修车修好了。

? 11. 山田さんは車を直したが、直らなかった。

山田修车了，但没修好。

12. 車は直った。

车修好了。

13. 田中さんは本を買った。

田中买书了。

? 14. 田中さんは本を買って手に入^{はい}った。

田中买书买到了。

? 15. 田中さんは本を買ったが、手に入^{はい}らなかった。田中买书了，但是没有买到。

16. 本が手に入^{はい}りました。

书买到了。

17. 彼はドアを閉めた。

? 他关门了。

? 18. 彼はドアを閉めて閉まった。

他关门关上了。

? 19. 彼はドアを閉めたが、閉まらなかった。

他关门了，但没关上。

20. ドアが閉った。

门关上了。

21. 私はパソコンを鞆に入れた。 我把计算机放进书包里了。
- ?22. 私はパソコンを鞆に入れて^{はい}入った。 我把计算机放进包里，放下了。
- ?23. 私はパソコンを鞆に入れて^{はい}が、入ら^{はい}なかった。 我要把计算机放进包里、但没放下。
24. パソコンがかばん^{はい}に入った。 计算机放进书包里了。

このように、日本語の他動詞の過去形は動作主の行為、そしてその行為の結果を表す機能が備わっているため、自動詞による行為の結果を繰り返し表す必要はない。中国語の動詞に「了」を付けた場合、行為の完了を表すだけで、行為をもたらした結果には言及していないため、行為の結果を表すために補語を用いて補って表さなければならない。日本語においては例のように他動詞の過去形に更に自動詞で結果を述べる必要はない。中国語は動詞だけで補語が省かれれば行為の完了は表すが、行為の結果には言及されていないため行為の結果は不明になるわけであるから、結果を表そうとするならば補語が必要になるわけである。

この点を見れば、日本語は行為の過程を焦点に表すなら他動詞になり、物事の結果を焦点に表すなら自動詞が用いられることになる。日本語においては、どちらか一方を用いて表現すればよいわけであるが、自動詞で表現するのが好まれるようである。一方、中国語は基本的に「動詞+補語」という構造で行為の過程とその結果を一緒に表す場合が多い。このように、行為の結果を表す方法において、日本語と中国語は違うのである。この違いは学習者の日本語の無意志自動詞の誤用につながるものだと考えられる。

3. 動詞の意志性と可能表現について

前述のように、可能表現にするには動作主の存在とその意志性が認められなければならない。他動詞の多くには動作主が存在し、意志性があるが、一部の自動詞も同じである。

25. 小学生たちも被災地のために寄付を集める。
26. 私は学生の間違^{はい}いを直す。
27. 田中さんは教室に入る。
28. 私は歩いて三階に上がる。

このような意志性のある他動詞と自動詞に「れる」、「られる」をつけて動作主が行為を実行する可能か否かを表す可能表現にすることができる。

- 25'小学生たちも被災地のために寄付を集められる。
- 26'私は学生の間違^{はい}いを直せる。
- 27'田中さんは教室^{はい}に入れる。
- 28'私は歩いて三階に上がれる。

動作主が行為を実行する意志を持たなければ他動詞であっても「れる」、「られる」を用いて可能表現にすることはできない。30, 32はその例である。

29. 彼は財布を落とした。

? 30. 彼は財布を落とせた。

31. 私はお腹を壊した。

? 32. 私はお腹を壊せた。

例 34、36 の自動詞のように動作主の存在とその意志が読み取れないような場合、可能表現にすることはできない。

33. 旅行の計画は壊れた。

? 34. 旅行の計画は壊れられた。

35. 窓が開かない。

? 36. 窓が開かれない。

このように見てくると、井島が指摘したとおり、「可能は人の行う行為の中に位置付けられることからそのもとなる動詞は<意志性>を持つこと」(井島2000.p.168)になり、「可能表現を作るもとの動詞には<意志性>が必要」(井島 2000. p.164)である。例 30、32 の他動詞においても、例 34、36 の自動詞においても<意志性>を持たない或いは持ち得ない場合、可能表現の形式が用いられないわけである。

そうであるならば、有対無意志自動詞は可能表現の形式にできないから、可能表現にはならないはずであるが、何故結果可能表現とされるのであろうか、それを考えなければならない。

無情物(意志を持たないもの)が主語になる自動詞、本稿で言う有対無意志自動詞は「自動詞文は X が A という状態から B という状態へ変化した」(庵 2001. p. 149)ことを表し、「出来事が自然現象や自動的に起こるものであり、動作主が存在しない」ものと、「出来事に動作主が存在するが動作主の意志(意図)が問題にならない」(庵 2001. p. 146)ものとの二種類がある。前者については本稿の考察対象ではないので、これ以上触れないこととするが、後者は表現の影に動作主が存在したとしても、井島が指摘したように「可能表現を作るもとの動詞には<意志性>が必要であった」から、動詞には<意志性>が認められなければ、可能表現にはできない。これは結果可能の表現にも当てはまる。つまり、自動詞だけでは結果可能の表現形式にできないし、結果可能表現にはならない。

4. 無意志自動詞の結果可能表現について

前述のように、無意志自動詞述語文には有情物動作主がないため、当然そのままでは意志性があるとは考えられない。しかし、無意志自動詞は物事の変化する性質を有し、変化の結果を表すことからそこに潜在的に意志性があると推測できよう。この潜在的な意志性は場面、文脈等に存在する動作主の意志性に触発されれば、無意志自動詞を含む表現全体が結果可能表現になる。つまり、無意志自動詞だけでは結果可能表現は成り立つのではな

く、無意志自動詞を含む表現全体によって結果可能表現の意味がもたらされるのである。

有対無意志自動詞の辞書形は物事の変化する性質を表す機能を有するが、自動詞自体は結果可能表現の形式にはならない。

37. 電気がつく。

38. ドアが開きますので、ご注意ください。

39. 患者：この病気は治りますか。医者：治りますよ。

37の「つく」、38の「開く」、39の「治る」は動作主の意志（意図）は問題にされていない。ただ「付く」、「開きます」、「治ります」という物事の変化する性質を有することを述べているだけである。つまり、「電気」、「ドア」、「病気」といった非情物は意志を持って何かの行為をするのではなく、「ついていない」「閉まる」、「病気を患っている」状態から「つく」、「開く」、「治る」という変化の性質を有していることを表しているのみであり、その変化の結果の可能性の有無については場面、文脈に存在する動作主にまつわる可能性次第になるわけである。

このような状態変化の性質を有する無意志自動詞の過去形は結果を表すことができる。他動詞、意志自動詞の過去形は行為の結果を表すのと同じである。だが、他動詞と意志自動詞は明らかに動作主とその意志性があるから、容易に可能表現の形式にすることができる。無意志自動詞はこれらと違って「動作主の意志が問題とならない」ため、無意志自動詞自身は可能表現の形式にできないが、場面と文脈に存在する動作主と意志性が現れて初めて結果可能表現となることが可能になる。

40. 管に水が入らない。

41. ドアが開いた。

42. ドアが開かない。

このような単独の表現は文脈なしで動作主の存在やその意志性は問題とならずに事実だけを伝える表現である。その表現の場面、文脈に存在する意志性の助けを必要とする。その助けによって動作主及びその意志性が存在していると認識されて初めて結果可能表現と理解される。

43. ぐいと押すとドアは開いた。

44. 管に水を入れたが詰まって^{はい}入らない。

45. 押しても、押してもドアが開かない。

「ぐいと押す」、「管に水を入れた」はつまり「押す」、「入れる」動作主が存在し、行為をする意志も明らかにあることになり、無意志自動詞を含む表現はその行為が実現されるかどうかを表す結果可能表現になる。同じく「押しても、押しても」にも動作主の意志により、押す行為を繰り返したが行為が実現不可能を表すから結果可能表現と認識されるわけである。

46. 腕が痛くて、どうしても手が上がらない。

46 のように、「どうしても」は「どんな手段・方法を用いても、結果的にそうしかならないと判断する様子」（新明解国語辞典第六版）の説明からもわかるように、手段・方法を用いる動作主が存在することが示唆されるわけである。

このように、無意志自動詞自身だけでは可能表現の形式にできないだけでなく、結果可能表現としても条件が揃っていない。無意志自動詞表現を結果可能表現として認められるためにはその無意志自動詞の表現に場面や文脈等で動作主の存在、その意志性が認められる必要がある。可能表現になる動作主の存在と意志性が必要という条件を満たしてはじめて結果可能表現になるのである。

5. 日中の表現方法の違いについて

他動詞で行為の過程＋完了で行為の結果を表す表現にするか、自動詞で行為の結果を表す日本語に対し、中国語では、動詞＋「了」は基本的に行為の過去完了を表すが、行為の結果までは言及されていない。行為の結果を表すには「行為＋結果」、即ち「動詞＋補語」構造で表す。日本語は他動詞の過去形で行為の過程そしてその結果を表すことも可能であろうが、「なる」型言語と言われるように、行為より結果の側面から事態をとらえる傾向があり、他動詞を用いる表現よりも自動詞で行為の結果の状態を表すほうが多いようである。一方、中国語は「動詞＋補語」構造で表現することが多い。

47. 車は直った。 車を直した。 車を直せた。

48. ドアが閉まった。 ドアを閉めた。 ドアを閉められた

49. パソコンは鞆に入った。 パソコンを鞆に入れた パソコンを鞆に入れられた。

中国語でそれと同じ意味を表現しようとするならば、一番自然な表現はやはり「動詞＋補語」の形式になるだろう。

50. ? 车好了。 ? 车修了。 车修好了。

51. ? 门上了。 ? 门关了。 门关上了。

52. ? 计算机进包里了。 计算机放包里了。 计算机放进包里了。

「自動詞と他動詞の違いは、自動詞の場合は、自然力の影響などで出来事が起こったのであって、そこには人間の意志（意図）は含まれていない、とらえているのに対し、他動詞の場合は、人間などが意志（意図）的にその出来事を引き起こした、とらえられているというところにある」（庵 2001. p. 97）。結果の状態を表す場合において、日本語は他動詞の過去形をもって表すこともできるし、自動詞の過去形で表すこともできるが、[なる]言語と言われるように自動詞で表すのが好まれるようである。一方、中国語は動詞或いは補語だけで表すことはまれである。

自動詞と他動詞のこのような違いは他動詞の可能表現形式と自動詞のいわゆる結果可能

表現との違いにも反映される。他動詞の可能表現には動作主とその意志性があるため、可能表現の形式にできるが、自動詞による結果可能表現には動作主の意志が問題とならないため、可能表現の形式にはできない。また「なる」型言語である日本語においては自動詞で結果を表す表現形式が多く使われる。一方中国語においては、動作主の存在とその意志性が表現に現れるのが普通であり、容易に可能表現の形式にすることができる。また多くの場合そのような表現形式が用いられる。

53. 他家的门开着，她推了推，推不动，里面扛上了。(姚 2008. p. 96)

54. 家の戸はかんぬきがかかっている、押しても開かなかった。

55. 交通不便，运输不够，常常就买不到煤油点灯。(姚 2008. p. 105)

56. 交通の便が悪く、輸送手段も十分ではなかったので、灯油もなかなか手に入らなかった。

57. 发了洪水，邮件送不去？(姚 2008. p. 105)

58. 洪水で郵便が届かなかった。

これらの表現において、日本語は動作主の存在と意志性がないような自動詞表現を用いるのに対し、中国語は基本的に「動詞＋補語」という動作主と意志性がある構造を用いて表現する。学習者が日本語の自動詞に「れる」、「られる」を付けて表現したがるのも中国語のこのような表現形式に影響されていることと考えられよう。この日本語と中国語との違いも学習者の結果可能表現の誤用の原因の一つであると考えられる。

6. 学習者の誤用の原因について

前述してきたように、日本語の無意志自動詞自身には動作主及び意志性が認められないため、無意志自動詞にそのまま「れる」、「られる」をつけて可能の表現形式にすることはできない。しかし、無意志自動詞に行為の変化を表す性質が備わっていて、その過去形は行為の結果を表すことから、表現全体における場面、文脈に含まれる動作主とその意志性に触発され、無意志自動詞が用いられる表現に結果可能の意味がもたらされ、結果可能表現となる。しかし、無意志自動詞は場面、文脈の助けがあっても、可能の表現形式にはならない。このように、無意志自動詞自体に意志性がないため、可能表現の形式にはならない。この両者の間にギャップが存在するわけである。

中国語の「動詞＋補語」構造には意志性が認められる可能表現形式であり、結果可能表現でもある。すなわち中国語においては可能表現の形式は可能表現という意味と一致しているわけである。そのため、学習者は中国語のこのような可能表現を同じく日本語の可能表現の形式にしようと、日本語の無意志自動詞に「れる」、「られる」を付け、誤用になってしまうわけである。このように、日本語と中国語とのずれが学習者の理解を誤らせ、誤用につながったと思われる。

7. 終わりに

本稿の目的は日本語の結果可能表現における学習者の誤用の原因を究明するところにある。日本語は「なる」言語と言われるように、他動詞で表現することもできるが、無意志自動詞を用いて結果を表すことが多い。これはまず中国語の「動詞＋補語」という表現形式を用いて表現する方法と異なる。また、可能表現は基本的に動作主とその意志性が必要であるが、無意志自動詞を用いる表現において、意志性を問題としないため、可能表現の形式にはできない。しかし、無意志自動詞が用いられる表現全体に動作主とその意志性がある場合において、結果可能表現になりうる。表現全体に含まれる意志性と無意志自動詞に意志性がないとのギャップが存在するわけである。中国語では「動詞＋補語」という表現形式で可能表現を表す。即ち表現の形式は表現の意味と一致している。日本語の表現方法と中国語の表現方法とのずれが学習者の理解を誤らせ、結果可能表現の自動詞に「れる」、「られる」を付ける誤用をおこしたのであろう。

注)

- 1: 他にも可能表現の形式はあるが、本稿では議論しないため取り上げないことにする。
- 2: 詳細は張威（1998）を参照されたい。
- 3: 本稿で言う「動詞＋補語」の補語は結果補語も可能補語も含むこととする。
- 4: 日本語には「試験を受けましたが、受からなかった」、「捜したが見つからなかった」といった行為だけを表す動詞もある。その過去形の「た」は行為の過去完了を表すのみで、行為の結果には言及されない。この場合、自動詞で結果を表すのが普通のものである。

参考文献

- 井島正博：2000 「可能文の多層的分析」『日本語のボイスと多動性』 仁田義雄編 くろしお出版
- 白川博之監修 庵他著 2001 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
スリーエーネットワーク
- 松岡 弘監修 庵他著 2005 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
スリーエーネットワーク
- 姚艶玲：2008「＜不可能＞の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』 日
中対照言語学会 白帝社
- 張 威：1998 『結果可能表現の研究』 くろしお出版
- 張麟声：2001 『日本語教育のための誤用分析』 スリーエーネットワーク

